

「自分で聞いて・・・分かったから」

ヨハネによる福音書 4章 39～42節

皆さんはそもそも、どんなきっかけで 教会をお訪ねになられたのでしょうか。また、すでにクリスチャンの方々は、どんなきっかけで 信仰にお入りになられたのでしょうか。おそらくは、それぞれに様々、多種多様かと思えます。生まれた家^{いえ}がたまたまクリスチャンホームで、「オギャー」とこの世に生を受けたと同時に 教会に通っていたという人もいます。かく言うこの私などもその一人です。もちろん、人生について真面目^{まじめ}に考え、与えられた生涯をどう生きるか、その答えを求めて 教会をお訪ねになる方々も少なくないでしょう。とはいえ、これまた当然ながら、そうした方々ばかりでないのも事実です。教会は幸か不幸か、割合としては女性の出席者のほうが多いのが普通で、その傾向は近年、さらにも増しているようにみえます。そこには考えるべき課題が横たわっているようにも思われますが、それはそれとして、そのためもあつてか、かつては実際、若い男性がガールフレンドを探しに教会に来るといった例も見られました。以前いた教会はそれとは逆で、教会にハンサムな男子青年がいたため、明らかに彼をお目当てに 近隣の女子大生が来ていました。東京時代には、礼拝堂がそれなりに絵になる教会だったため、「結婚式をしてほしい」と訪ねてこられ、その後、礼拝に出席されたカップルも一組^{ひとく}みならずおられました。讚美歌が好きで、「聞いていると気持ちが落ち着くので」と言って、教会の音楽を楽しみに来られる方もおられます。さらには、「子どもをいい子に育てるために」といった いわば子育ての一助にしようと、子どもさんと同伴で教会に来られる親御さん。また、「宗教心や信仰心^{かんよう}というのは人間にとって大切なものだから」と言って、いわば心の情操^{かんよう}を涵養するために礼拝に来られる方もおられます。もちろん、うれしいことに、世間には見られない 打算のない温かな交わり^ひに惹かれて教会に来られたと云ってくださる方もおられます。と同時に、その一方でまた、人に裏切られ、その傷に苛^{さいな}まれつつ、嘘^{うそ}のない真実な存在を求めて 教会に足を向けられた方。統一協会に半ば監禁されていたところを親御さんの必死な努力で救出され、心の回復^{かいふく}のために 教会に連れられてきた方。そんな方たちもおられました。事ほどさように、教会を訪ねるきっかけも信仰に入るきっかけも多種多様で、人様々なのが実際のようなのです。

私は、教会に来るきっかけはいろいろでかまわないと思っています。もちろん、聖書に関心を持ってこれに真つすぐ一直線であれば それに越したことはないのですが、聖書が差し出すイエス・キリストの良き音信^{おとずれ}「福音」に最終的に導かれさえすれば、入り口は様々で結構と考えています。ただ、一つだけ気づかされるのは、教会を訪ねるにしても信仰に入るにしても、そこには何らかのかたちで 誰かしら「人」が関わっているということではないのでしょうか。誰かに何らかの影響を受けて 教会や信仰に目を向けるようになる、ということです。それは、本やテレビなどに出てくる人物

に触れることからかもしれません。あるいはまた、反面教師的に人に出会うこと、すなわち 悪い人に出遭って傷つけられ、そしてそのような人間とは違う存在を求めるといふ仕方でかもしれません。が いずれにせよ、形はどうあれ、私たちは良い意味でも悪い意味でも、誰かに触れることを通して教会に足を向け、信仰に心を向けることがほとんどではないでしょうか。そして、誰がいつ・どのようなかたちでそうなるか、それは 教会にとっても当の本人にとっても分かりえないように思われます。思いがけない時に、思いがけない仕方で、思いがけない人に触れて、そうなる。何の気なしに教会に立ち寄られた方が、そのほんの数カ月後のクリスマスにバプテスマを受けられる。「自分は死ぬちょっと前に駆け込みでバプテスマを受けるんやから、焦らない焦らない。滑り込みだって、天国には行けるんやろ」と、そんな冗談を言っただけで構えていた人がある日突然バプテスマを申し出て、みんなを驚かせる。そんなこともあります。「出会い」というのは、分からないものです。神様のなされる御業みわざというのは 実際、分からないものではないでしょうか。ただ、そこには何らかのかたちで、人が関わっている。ほとんどの場合、誰かしらによって 福音が分かち合われている。そのことだけは間違いなく思われるのですが、いかがでしょうか。そして、それは教会の働きにとって まずもって大事なことであるように思わされてもいます。

今月の聖書の箇所、サマリアの町シカルの人々の回心の出来事はそのことを如実に物語ってはいないでしょうか。そこには、福音の分かち合いの、ある種 典型的な形が見て取れるように思われます。少し前の 30 節で、福音書は語りました。「人々は町を出て、イエスのもとへやって来た」。今回の 40 節でも、もう一度 繰り返しています。「そこで、このサマリア人じんたちはイエスのもとにやって来て・・・」。そして、その人々が初めにサマリアの女性の言葉を聞いて 主イエスを信じ、続いて主イエス御自身の言葉を聞いて さらに多くの者たちが主イエスを信じた、と語ります。39 節、41 節にあるとおりです。それは、ほんのちょっとしたことから始まりました。ユダヤ地方をあとあとにして、暑いなか サマリア地方まで歩いてこられたイエス・キリストが喉のどを渴かせ、ヤコブの井戸のそばに座っておられた。そこに、男に身をもち崩したサマリアの女性が水を汲みに来ます。その女性に、主イエスが「水を飲ませてくれないか」と語りかけられる。女性はびっくりして、問い返します。「あなたには、私たちサマリア人に対する憎しみの気持ちがないのですか」。そこから始まって、人種的な偏見も女性に対する蔑視も、崩れた者に対する見下しも何一つ持たれない そんな主イエスに、サマリアの女性は心を開かれ、その内に尋常でないものを感じ取ります。シカルの人々はその女性にイエス・キリストの話を見聞きされ、それで主イエスのもとにやって来たのでした。そして 40 節、「自分たちのところにとどまるようにと頼」みます。主イエスは彼らの願いに応じて「二日間 そこに滞在された」と、聖書は同じ 40 節で記しています。ほんの 2 日間とはいえ、主イエスは間違いなく 彼らの家に泊まれ、彼らと一緒に食事をされ、そして昼夜ちゅうやを惜しんで言葉を交わされたにちがひありません。弟子たちの驚きは、どれほどのものだったのでしょうか。自分たちユダヤ人と敵対関係にあるサマリア人と、しかもよりによって その札付きの女性と言葉を交わされる。それだけでもびっくりしているのに、今度は「よろしい。喜んで留とどま

ろう」と サマリアの町シカルの彼らのところに留まり、そしてその家に泊まり、食事までされて、彼らと膝詰めで話し込まれる。ユダヤの当局に知れたら、どんなことになるか。大きなリスクを負った、とんでもないことでした。けれども、イエス・キリストはあらゆる隔てを乗り越え、そのようにして サマリア人の家に入られました。決定的な告白は、そこから生まれたのでした。主イエスの言葉をじかに聞いた彼らサマリア人は、言います。42 節、「この方が本当に世の救い主であると分かった」

信仰はしばしば、予期せぬ時に予期せぬ仕方で、そのきっかけが舞い込むようです。この二日間というのは、サマリアの女性にとってもシカルの人々にとっても まさに青天の霹靂、降って湧いたような二日間だったにちがひありません。しかしそれは、うれしい予定外だった。残りの人生を意味あるものにする、シナリオ外のうれしいハプニングだったのではないか。そう思わされています。サマリアの女性にとっては、もちろん。そればかりか、シカルの町の人々にとってもそうだったのではないのでしょうか。事の発端は、町でも評判の いわゆる阿婆擦れの女の言動でした。が それにしても、サマリアの女性の何がそうさせたのか。いったい、サマリアの女性の何が、「信仰の告白」などという大それたことを町の人々に引き起こしたのか。そう思わされもします。私は、思います。その言葉もさることながら、人々の心を真実 捉えたのは、彼女の人となりの変わりようではなかったか。顔つきが違ってる。言葉が弾んでる。口元に喜びが満ちている。自分たちの知っている彼女ではない。まるで別人のようだ。町の人たちはそう感じて、驚かされたことでしょう。彼らをイエス・キリストのもとに導いたのは、女性の過去を見抜いて言い当てた いわゆる霊視の如きものの証言ではなく、それまで人目を避けて 誰とも口をきこうとしなかったその女が今、心を熱くして、誰の目も憚らずに「あなたも来て見てください」(4:29) と叫んでいる。どうしたって変わりようもないと思っていたその女が今、すっかり変わって 自分たちの目の前にいるという、その驚きではなかったか。町の人々は彼女のそんな変わりようを目のあたりにし、その驚きのなかで、彼女の口からほとぼり出る言葉に導かれて、主イエスのもとに赴いたのではないか。そう思われるのです。それは ほかでもない、「この女をこれほどまでに変えられる方なら きっと、信頼に値するお方にちがいない」という、イエス・キリストに対する信頼のなせる業だったのではないのでしょうか。

私は、シカルの町のこの出来事の中に、主イエスの福音の分かち合いの典型的な形を見るような気がします。すなわち、イエス・キリストを紹介する その紹介の手がそこにあった、ということです。16 世紀のスペインの修道女に、アビラのテレサという女性がいます。カトリックで聖人に列せられたことから「聖テレサ」と呼ばれることもあれば、ラテン語で「イエスのテレジア」とか (あと一人のテレジアと区別して) 「大テレジア」と呼ばれることもあります。神秘主義的思想が後の神学者たちに影響を及ぼした人物でもありますが、そのテレサが次のような言葉を遺しています。「キリストの体」と題された言葉です。

キリストの この地上における体、
それはあなた方。
あなた方こそ、
キリストの御業を行なう その手。
あなた方こそ、
キリストがこの地上を歩まれる足。
あなた方こそ、
思いやりに溢れるキリストの目がこの苦難の世界に注がれる眼差し。
キリストは、この地上においては、
あなた方以外には 体を持ち給わないのです。

「キリストは、この地上においては、あなたがた以外には（つまり、この私たち以外には）体を持ち給わない」と、テレサはそう言います。私たちが体を動かして、汗をかく。主イエスはこの世の日々の現実においては、そうする私たちにこそ伴われ、私たちのその汗を通して世に御心をなし、その御業を行なわれる、と そう言うのです。主が直接 事をなされることなどないと、そのすべてを否定するわけではないでしょう。そうではなく、キリストの目であり、手足であり、そのようにしてその体であるこの私たちの務めの重く不可欠なことを指摘したものとと言えます。キリストの福音を届けるには、それを運び伝えて分かち合う人がいなければならない。「聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、^の宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう」（ローマ 10：14）と 使徒パウロも言っているように、ということではないでしょうか。

そこで、その「分かち合い」です。それは、言うまでもなく、言葉によってなされる部分もあるでしょう。けれども、その言葉には生きたいのちがなければならない。言葉を生み出す内なるいのちが息づいていなければならないように思います。「^{おそ}恐れ多くて、身の程知らずで、そんなこと二度と言えないけど・・・」と前置きしたうえで、友人の牧師がこんな話をしてくれました。「『イエス・キリストの愛とか恵みとかは、頭では理解できるんですけど、いまひとつ実感できないというか、リアリティーとして感じられないんです』という人がいてね。『バプテスマは受けたいんですけど、そのところがあとひとつ・・・』というわけだよ。かなり突っ込んで話し合ったんだけど、どうしても『もうひとつ分からない』と言う。それでね。生まれて初めて、とんでもないことを言ってしまった。『ぼくの中にも何か良いものが見えろしたら、それがイエス様の働かされているしるしですよ』ってね。今 考えてみると、なんともとんでもなくて^{すご}凄いことを言ってしまったと小さくなっているんだけど、要は、自分の中に何か良いものがあるとしたら、それはぼくに備わったものではない。イエス様から頂かなければ、自分の中にはそんなものないことを知ってるからなんだ。幸いにも、その人はそれで最終的に決心をされて、バプテスマを受けられたけどね」。人を真実 信仰に触れさせるのは単なる言葉のあれこれではなくて、そこに

生きて働かされているイエス・キリスト、そのお方にほかならない。友人の牧師はそう言わんとしたの
 でした。聖書が「(信仰の) 証し」と言うとき、たしかにそれは、単なる言葉を越えた、言葉の内に
 息づくこのよあかうないのちの証しのことだろうと思わされたしだいです。シカルの町の人々を主イエス
 のもとに導いたのも、サマリアの女性の単なる言葉の説得力ではない。そうではなくて、その言葉の
 内にほとぼり出していたイエス・キリストのいのちだったにちがいありません。言葉の内に息づくい
 のちの源。聖書の信仰というのは、それに触れることによって知られるもののように思われます。

シカルの町の人たちはこうして、一人ならず、主イエスへの信仰へと導かれたのでした。しかしな
 がら、ここであと一つ、見過ごしてはならないことがあるように思います。それは、彼らが初め サ
 マリアの女性の取り次ぎによって主イエスのもとに赴いたとき、その内にたしかに 主イエスへの信
 仰が芽生えていたにしても、それはいまだ信仰心とでも呼ぶべきもの、すなわち信仰的な思いとでも
 言うべきものであって、はっきりとした信仰の告白とはなっていなかったということです。42 節に
 なって初めて、「わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かっ
 た」と語っていることから、そのことが分かります。そればかりではありません。同じ 42 節で、
 町の人々はこうも言っています。「わたしたちが信じるのは、もう あなたが話してくれたか
 らではない」。ここに至って初めて、人々の信仰は自分のものになった。自分で心に信じたことを
 自分で言葉にして、自分で告白した。このとき初めて、いまひとつ曖昧でおぼつかなかった 借り物
 の信仰心とでも言えるようなものが、自らの信仰の告白として明確になったのでしょあいまいう。それはま
 さに、誰かを介してではなく、自分自身でイエス・キリストに見え、主イエスの真実にじかに触れ
 た、ということではないでしょうか。聖書の信仰というものを求めるならば、私たちもまた、自分で
 イエス・キリストにお会いしなければならぬ。主イエスにじかに触れなければならぬ。自分の足
 で主イエスのもとに赴いて、自分の目と耳でその言葉を聴き、事を確認しなければならぬのではな
 いでしょうか。困るのはやはり、借り物のそれのように思います。宗教によっては、信者の誰もが指
 導者と同じ顔つきをして、オウムのように同じ言葉を繰り返す団体があります。信者一人ひとりの自
 分というのはいったい、どこにあるのでしょうか。それはコピーであって、生きた信仰の告白とは
 言えないでしょう。そうした現象は時に 教会でも見られぬことなく、残念に感じられます。牧
 師の真似事は言わずもがな、その言葉や説教それ自体が信じる対象となっているような信仰もやはり、
 どこか違うように思われます。ましてや、キリスト教ではなく・・・先生教と揶揄されるような牧師
 崇拜的信仰は論外と言えるでしょう。聖書の信仰とは本来、人やその言葉に基を置くものではないか
 らです。信じるのはイエス・キリスト、そのお方の真実であって、その御言葉において 私たちは主
 イエスとじかに見え、自分自身の心と言葉でイエス・キリストへの信頼を告白するのではないで
 しょうか。事実、サマリアの女性は「わたしたちが信じるのは、もう あなたが話してくれ
 たからではない」と町の人々に言われても、何一つ言い返していません。以前の彼女なら きっと、
 「なによ、私のおかげで会えたんじゃないの」と食ってかかっていたことでしょう。が今や、
 彼女は穏やかです。サマリアの女性の内にもまた、彼女自身のものとして、主イエスへの信頼が膨ら

んでいたからにちがいません。

ヴァルター・リュティというスイスの牧師がこの箇所のサマリア人^{じん}たちを称し、面白くも的確なコメントをしています。名説教家として広く知られ、講解説教のシリーズが邦訳でも出版されていますが、言いて妙なこんな言葉です。「これらのサマリア人たちは、いわば最初のプロテスタントである」。プロテスタントとは 周知のとおり、16 世紀にヨーロッパで起こった宗教改革によって生まれた キリスト教の新たなグループです。新教とも呼ばれ、旧教と呼ばれるカトリック教会に対して、信仰上の改革を行ないました。そのプロテスタント教会が大事にしたこと。それは、自分でじかに聖書を読み、自分で直接 イエス・キリストに向かうことでした。リュティがシカルの町の人々を「最初のプロテスタント」と呼んだのは、こうした意味からです。掻い摘まんで申し上げれば、当時、カトリック教会ではラテン語の聖書が用いられていました。正確に言うなら、ラテン語の聖書だけが用いられていました。ラテン語ですから、一般の人たちは読めません。しかも、ラテン語が読める人であっても、自分で聖書を読むようには勧められない。講壇などに備え付けられた教会の聖書は、持ち帰られないように、チェーンで繋が^{つな}がれていたといえます。つまり、一般の人間が自分で聖書を読んだら、どんな好い加減^{い かげん}な読み方をするか分かりやしない。間違った解釈をして、信仰を誤るのが関の山だ。聖書は聖職にある者だけが読み、正しく解釈をして、人々に伝える。一般人はそれを聞いて 信仰生活に励むのだ、と そう教えられていたわけです。それは すなわち、私たち・一般の者たちが「神を知りたい。イエス・キリストというお方にお会いしたい」と願っても、自分では直接 そうできない。一定の位にある聖職者を介してでないと できない。いわゆる偉い人を通してしかできない、ということでもありました。これに対し、プロテスタントは言いました。「それは違うんじゃないか。誰もが自分で御言葉^{みことば}を読み、自分で思いをめぐらし、自分で祈って、そして 自分でイエス・キリスト^{まみ}に見えることができるはずだ。聖書はそう教えているはずだし、実際、人は誰でも、聖霊の働きにより、聖書の御言葉を通して、主イエスに直接 お会いすることができる」。時すでに、グーテンベルクが活版印刷の技術を開発していました。こうして、宗教改革者のルターが聖書をドイツ語に翻訳し、印刷機で大量に印刷。人々は日常の言葉で、しかも自分の目でじかに、そして容易に聖書が読めるようになったのでした。

バプテストの教会も、プロテスタントの一員として、こうした伝統を受け継いできました。バプテストはある意味で、このようなプロテスタントの伝統を人一倍 前面に掲げてきたグループとも言えるでしょう。そのバプテストが当初から大事にしてきたものは何かというと、それは 広く言われているように、(恵みの神の導きのもとにおける) 自覚的な・主体的な信仰というものでした。借り物でも譲^{ゆず}り物^{もの}でもない、自分自身のもので告白された信仰ということです。バプテストは今日まで、様々な主張を行なってきました。乳幼児の洗礼は、これを行なわない。信徒は皆、神学者でなければならない。自分なりの信仰理解を持たねばならない、ということです。教会員は誰もが平等で、牧師もその例外ではない。教会はそれぞれ自主独立で、相互に支配・従属の関係にあってはならない。良心の自由と思想信条の自由が保障されなければならない。これら以外にも、まだまだあります。で

すが、それらのすべてを貫いて その底に流れているものは何かといえば、それこそ、一人ひとり
 自^{みづか}のものとしての信仰の尊重にはかかなりません。要するに、自分でちゃんと聖書を読み、読んだそ
 の御言葉を通して 自分でじかに主イエス^{まみ}に見え、そして その恵みの御旨^{みむね}に従う。そうした姿勢で
 す。バプテスト教会は従来、赤ちゃんからお年寄りまで 全年齢層にわたる教会学校の形成に努めて
 きたため、教会学校の整備という面でも知られてきましたが、それもまさに、各自がきちんと聖書を
 読んで、その学びを交換することによって 聖書の御言葉をそれぞれのものにしていくこと。そして、
 そのようにして養われた各人の信仰に押し出されて、教会学校のその場を 御言葉に基づく宣教の場
 としていくこと。そこに、そもそもの目当てが置かれていました。

振り返ってみれば、この私自身、そのような信仰に至る道筋を歩んできた者の一人でもあります。
 クリスマンホームに生まれ、生まれたときから 教会に行っていました。それは願ったからといっ
 て 誰もがそうなれるものでもなく、その意味では何より大きな恵みだったと言えます。ただ、その
 一方で、生まれながらのクリスマンファミリーということで、そこで見聞きする信仰を自分で吟味
 し、自分で消化して、自分の告白にすることに鈍くなっていたのも事実です。高校一年の 6 月、15
 歳のときにバプテストを受けました。けれども、その後^{としつき}に続く年月の揺らぎのなか、様々な葛藤を
 抱^{いだ}き、ついには信仰を根本から問い直さねばならぬところにまで立ち至りました。それまで培って
 きたものを何から何まで、いったん、すべて白紙に戻す。信仰の存在しないところに立ってみる。イ
 エス・キリストとは 本当に、自分の生涯を懸けるに値する人物なのか。なぜ、バプテストを選ぶの
 か。すべてが出直しです。立っていた足もとの土台が失われてなくなるような、そんな恐ささえあり
 ました。が そのようにして、聖書を一から、初心で読み直しました。自分の目で、自分の心で、浸^{ひた}
 るようにして読み直しました。心の目を据えて凝らして、聖書のイエス・キリストを見詰め直しまし
 た。その神と格闘しました。噛みつき、引導^{か いんどう}を突きつけ、議論を闘わせました。おそらく、後^{あと}にも
 先にも二度とない、私にとって必死なギリギリの時だったと思います。きつくなかったと言ったら、
 嘘^{うそ}になるでしょう。ですが、今 振り返ると、凝縮された 濃密で豊かな時だったとも思います。そ
 して今、心穏やかにされて、ここでこうして生かされています。私がこうしていられるのはイエス・
 キリストの真実に対する信頼があればこそで、私は今やっと、自身の信仰と呼べるようなものの入り
 口に立てたように感じています。

自分で聖書を読み、自分で思いをめぐらし、自分で祈って 主イエス^{まみ}に見える。シカルの町の人々
 はたしかに、サマリアの女性の証^{あか}しによって 主イエスのもとに赴きました。が 彼らは、それだけ
 でよしとはしません。主イエスに「自分たちのところにとどまるようにと頼^{たの}んだ」のでした。
 しかも、このところは、元のギリシア語^{ヘーロートーン エロータオー}（*ἠρώτων* < *ἐρωτάω*）を見ると、「(しきりに) 願^{ねが}い続け
 た」というニュアンスの表現（過去における継続や繰り返しを表わす未完了過去）で記されています。
 彼らは、ちょっとお目にかかっただけでは満足しなかった。もっと親しく、もっと時間をかけて、じ
 かに話を聴きたい。そう願って、自分たちの所に泊まってくれるように、と 熱心に懇願を繰り返し
 たのです。福音書に続いて「使徒言行録」という 使徒たちの働きを記した記録が新約聖書に収めら

れていますが、そこには、ベレアという町での逸話が書き留められています。パウロたちがベレアを訪れ、イエス・キリストの福音を語ります。すると、ベレアの人たちは熱心に御言葉に耳を傾け、「そのとおりでどうか、毎日、聖書を調べていた」（使徒言行録 17:11）というのです。本当にそのとおりでどうか、自分で御言葉にあたる。それは大切なことではないでしょうか。私がここにこうして書き連ねている この一文についても、事は同じです。望むらくは、そのことを、自分一人ではなく、誰かしらと一緒にすること。そうし合える人たちの輪を持つことです。それが大事なように思われます。そのようにして、その中で 各人一人ひとりが自分の目と耳で、そして自分の心でイエス・キリストを直接 味わう。そのとき、聖霊の助けを得て、自分自身の信仰の告白へと導かれるように思います。「自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かった」と、シカルの人々と声を合わせて告白する者とされていくのではないのでしょうか。

教会とはそもそも、何のために この世に存在させられているのでしょうか。それはまさに、サマリアの町シカルで起こされたと同じことのためではないのでしょうか。イエス・キリストのいのちを分かち合うということです。教会が内輪の自分たちだけの場所であったなら、世のただ中に建てられていることの意味はさほどのものでもないように思われます。主イエスの福音を広く分かち合い、そのいのちに共にあずかる。そして、この自分もその一部である 人の世の闇を見据えつつ、そこでなおも神の御心を形にできるよう、祈りと赦しを携え合って 交わりを豊かに深く研ぎ澄ませていく。上からの助けを頂いて、神の国の そのような先駆けを創り出すこと。それが教会に期待されていることではないのでしょうか。聖書の信仰とは本来、そうした汗を厭わないもので、私たちは主イエスの愛に心動かされて、力まずとも そのところへと足を向けさせられるように思われます。どこもがそんな教会でありたい、そんな教会になりたい、と願っています。

出来事はサマリアの町シカルで起こりました。ユダヤ人と縁を切っていた、いわばユダヤの外にあった そのサマリアの町で起こりました。イエス・キリストが公に宣教を始められて、わずかしか経っていないときのことで、それはまさに、主イエスの福音が純粋なユダヤ人の外に届けられたその第一歩とも言える出来事でした。このとき、イエス・キリストは人を隔てるすべての中垣を越えて、シカルの町の人々が告白したとおりに、「世の救い主」へと その第一歩を踏み出されたのでした。

これが、ヨハネ福音書が丸々2 ページ以上にわたって記す「サマリアの女性と、サマリアの町シカルの人々の出来事」の締め括りです。出来事の全体から、私たちははたして 何を聴き取り、どんな生き方へと押し出されるのでしょうか。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは人々の予想を裏切り、サマリアの女性の、しかも社会からはみ出た女性の言葉を用いて、

シカルの町の人たちに触れてくださいました。女性の言葉それ自体は、どれほど洗練されたものだったでしょうか。どれほど、人を惹き付ける魅力に富んだものだったでしょうか。しかしあなたは、ほとぼしり出る その言葉に添い立ってくださいました。そして、御自身の福音を人々へと届けられました。

願わくは、それがたとえ小さく貧しいものであっても、サマリアの女性になされたと同じように、人の言葉と業を祝福し、あなた御自身が喜びのいのちを届けてくださいますように。

何にも増して、内から湧き上がるうれしさを、サマリアの女性と同じように、この私たちにも教えてください。そのためにも、御子イエス・キリストに自ら親しく触れることができるよう、一人ひとりを導いてくださいますように。聖書の御言葉に、今日もまた手ずから、静まって深く向かわせてください。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン